

## 大学生の親との依存・独立の関係について

— 進路選択との関連から —

小 島 美由紀

### 問題と目的

これまでの青年期における親子関係についての研究では、青年が親や周囲のおとなへ抱く依存と、精神的な自立を求める独立という概念が用いられることが多かった。依存と独立についての研究はそれほど多くはなく(久世, 平石, 辻井, 1990), 親子関係の中で扱われてきたというより, 親は対象の一つとして捉えられてきた(高橋, 1968a, 1968b, 1970, 1974, 1980)。そのため, ある個人が様々な対象に様々な形でもつ依存欲求を総称して依存性という概念が用いられてきた。また, 加藤・高木(1980)や井上(1995, 1999)により, 親からの独立の側面についての研究がすすめられてきた。これらの研究をふまえて, 本研究では依存欲求及び独立欲求をそれぞれ「生活上の具体的な支えではなく, 慰め・是認・注意・保証・心の支えなどの肯定的な顧慮・反応を親に対して求める欲求」「親の考え・価値観に左右されない, 自己の独自性を保とうとする欲求」と定義する。

従来の青年期における親との依存や独立を扱う研究は, 実生活の上での依存を暗黙の前提として, 意識の上での依存や独立を扱ったものがほとんどであった。そのため, 現代青年の特徴は実際生活の面ではきわめて依存的であるという一般的な指摘に反して意識の上では独立性が高いとされる側面が, 加藤・高木(1980)によって指摘されている。これらのことから, 本研究では, 大学を卒業した後に, 両親から得られる実生活上の具体的な援助と, 両親に対して青年が行う実生活上の具体的な援助について取り上げる。

また, 実生活上で自立するためには, 就職による経済的安定性を得ることが必要であると思われる。日本の青年についての職業選択の形成過程は, 白井(1992)がまとめているように, 学業成績による, 学校選択・学部選択が職業選択の重要な決定因となっている。そのため, 日本の大学生は, 大学生になってから具体的な職業について考え始め, 就職活動に望むと考えられる。本研究では職業に対する意識として, 職業レディネスと職業志向を取り上げることとする。

本研究では, 進路決定を行う大学4年生を対象として, ①心理的な親への依存欲求・独立欲求と就職後の具体的な親からの援助に対する期待・親に対してどの程度の支援を見込んでいるのかとの関連性, ②就職後の具体的な

親からの援助に対する期待・親に対してどの程度の支援を見込んでいるのかと職業に対する意識との関連性③心理的な親への依存欲求・独立欲求, 親からの援助期待・親への支援見込, 職業に対する意識が, どのような構造で関連しているのかについて検討することを目的とする。

### 方法

#### 1. 質問紙の構成

(1)親からの援助期待尺度の作成: 予備調査で, 就職活動を行う大学4年生の学生が, 就職後に親からの援助を期待している程度と, その内容, また親への援助を考慮している程度とその内容について自由記述を求め, その結果をもとに21項目からなる尺度を作成した。各項目に対して4点尺度で回答を求めた。

(2)独立欲求尺度と依存欲求尺度: 井上(1999)が作成した84項目からなる尺度のうち, 因子分析の結果から項目を選定し, 独立欲求尺度として14項目, 依存欲求尺度として15項目を設定した。各項目に対して5点尺度で回答を求めた。

(3)職業レディネス尺度: 若林・後藤・鹿内(1983)が作成した30項目からなる尺度のうち, 21項目を用いる。各項目に対して4点尺度で回答を求めた。

(4)職業志向尺度: 若林・後藤・鹿内(1983)が作成した30項目のうち, 因子分析の結果抽出された26項目を用いた。各項目に対して5点尺度で回答を求めた。

(5)フェイスシート/ボトムシート: フェイスシートでは被験者の所属, 学年, 年齢, 性別を, ボトムシートでは現在の親との同居・別居状態, 就職予定, 就職後の親との同居・別居予定を調査した。

2. 被調査者 愛知県内にある, A大学法学部, 経済学部, 理学部, 工学部, 及びB大学人文社会学部の4年次の大学生217名(男性175名, 女性42名)を対象とした。

3. 調査期日 平成14年10月から11月にかけて実施した。

4. 手続き A大学法学部, 経済学部, B大学人文社会学部では, 調査は授業時間の一部を用いて, 集団で実施した。調査の所要時間は, 約20分であった。A大学理学部, 工学部では, 学科事務を通して配布・回収した。回収率は理学部で24.85%, 工学部で35.88%であった。

## 結果と考察

### 被験者の内訳について

全体のうち就職先が決定していると回答した被験者は59名(27.19%)、進学する予定と回答した被験者は123名(56.68%)であった。理学部及び工学部の学生が全体の88.58%を占めており、このことが、男女比、進路状況に大きな影響を与えていると思われる。

### 尺度の検討

それぞれの質問項目を用いて、因子分析(重み付けのない最小二乗法—プロマックス回転)を行い、因子負荷が.40に満たなかった項目を除外し、親からの援助期待尺度(7項目)、親への支援見込尺度(8項目)、依存欲求尺度(11項目)、独立欲求尺度(13項目)、職業レディネス尺度(15項目)、職務挑戦志向尺度(14項目)、人間関係志向尺度(7項目)、労働条件志向尺度(4項目)が作成された。それぞれの評定に得点を与えて点数化し、合計したものをそれぞれの得点とした。全ての尺度について $\alpha$ 係数が.70以上であった。

### 依存欲求・独立欲求が親からの援助期待・親への支援見込へ与える影響について

依存欲求尺度得点が平均値43.57以上を高得点群、以下を低得点群とし、独立欲求尺度得点が平均値40.65以上を高得点群、以下を低得点群とした。これを用いて、依存欲求と独立欲求を独立変数、親からの援助期待と親への支援見込を従属変数とする2要因2水準の分散分析を行った。その結果、男性では、それぞれに依存欲求尺度得点の主効果が見られた( $F[1,166]=9.77, p<.01, F[1,168]=24.68, p<.001$ )が、女性では見られなかった。このことから、男性では、依存欲求の高さには親への親密感や親近感といったものが反映されており、依存欲求が強いほど具体的な援助や支援を望むようになることが示唆された。一方女性では、依存欲求そのものの強さは男性と変わらないにもかかわらず、それが具体的な援助や支援を望む気持ちにはつながらないことから、女性にとっての依存欲求とは単に親への親密感や親近感といったものを表しているのではなく、心のよりどころとしての親を求める気持ちが反映されていると考えられた。

また、進路状況(就職先決定、進学、進路未定)毎に検討した結果、親への支援見込に対して、就職先決定の者と進路未定の者では独立欲求の主効果が見られた( $F[1,55]=8.52, p<.01: F[1,28]=5.84, p<.05$ )が、進学者ではみられなかった。また、就職先決定の者では、独立欲求が弱い方が親への支援見込が高まるのに対して、進路未定の者では、独立欲求が強い方が親への支援見込が高まるという、逆の影響がみられた。これらのことから、進路が未定の者は経済的な独立の見通しがな

い状況といえ、心理的に親とは異なる自己を持ちたいと願う独立への気持ちの高さが親に対して自分が支援してあげたいという気持ちにつながりやすいのではないかと考えられた。一方、就職先が決定した者では、独立欲求の弱さは親からの関わりを拒否せずに受容できることを示しており、自分から親に対して支援をしてあげたいという気持ちにつながるのではないかと示唆された。

### 親からの援助期待・親への支援見込が職業レディネス・職業志向へ与える影響について

親からの援助期待尺度得点が平均値16.60以上を高得点群、以下を低得点群とし、親への支援見込尺度得点が平均値23.90以上を高得点群、以下を低得点群とした。これを用いて、親からの援助期待と親への支援見込を独立変数、職業レディネスと職業志向を従属変数とする2要因2水準の分散分析を行った。

その結果、男性においては職務挑戦試行と人間関係志向に対して親への支援見込の主効果がみられた( $F[1,165]=10.00, p<.01: F[1,168]=14.62, p<.001$ )が、女性では有意な効果はみられなかった。このことから、男性は親に対して具体的な援助をしてあげようとする気持ちが強い方が、やりがいのある仕事を求める気持ちと職場での良好な人間関係を求める気持ちが高まるということが示唆された。

### 依存欲求・独立欲求が職業レディネス・職業志向へ与える影響について

依存欲求尺度得点が平均値43.57以上を高得点群、以下を低得点群とし、独立欲求尺度得点が平均値40.65以上を高得点群、以下を低得点群とした。これを用いて、依存欲求と独立欲求を独立変数、職業レディネスと職業志向を従属変数とする2要因2水準の分散分析を行った。その結果、職業レディネスに対して、依存欲求尺度得点、独立欲求尺度得点の主効果が見られた( $F[1,208]=18.09, p<.001: F[1,208]=15.59, p<.001$ )。また、職務挑戦志向に対して依存欲求尺度得点、独立欲求尺度得点の主効果が見られた( $F[1,207]=24.07, p<.001: F[1,207]=16.06, p<.001$ )。さらに、人間関係志向に対して依存欲求尺度得点の主効果が見られた( $F[1,210]=31.96, p<.001$ )。このことから、親への心理的な依存欲求や独立欲求の強まりと職業へ対する意識の成熟度の高まりが関連することが明らかとなった。そのため、親に対する依存欲求が青年の自立を妨げるものとはいえないことが示唆された。

### 大学生の親子関係と職業決定について

卒業期における親子関係については、学生相談の事例から父親(またはそれに代わる人)との関係を整理しなおすこと、受け入れることが学生相談の面接の中で話題

となることが多いとされている（鶴田，1994）。このことから卒業期の学生にとって親子関係が重要な位置を占めているといえる。本研究では，職業に対する意識と親への依存欲求や独立欲求との関連がみられた。卒業期の学生にとって親子関係が重要な位置を占めていることが学生相談に訪れる学生だけでなく，より多くの学生にあてはまる可能性が示唆された。今後も，卒業期における親子関係についてさらに検討することが必要であろう。

#### 今後の課題について

本研究では進路状況による差も検討したが，ある時点での進路を問題にしているのので，進路決定をしていくプ

ロセスの中で，親子関係がどのような影響を及ぼすのかについては十分検討できなかった。特に，進路未決定の者でみられた特徴は，進路が決められない者に特徴的であるのか，進路が決まった者でも決まる前には同じような特徴がみられたのか，といった点については不明である。このようなプロセスの中で，親子関係が職業意識に及ぼす影響がどのように変化するのかということを検討することで，職業決定を先延ばしにするような，モラトリアムの学生についても知見を深めることが可能であると考えられる。今後は，そのような観点からの研究も必要であろう。